粕屋町文化財調査報告書第 49 集

戸原堀ノ内遺跡第 3 地点

2019
粕屋町教育委員会

はじめに

本書は粕屋保健福祉事務所増築工事に伴い、平成 30 年度に粕屋町教育委員会が実施した粕屋町戸原東に所在する戸原堀ノ内遺跡第 3 地点の発掘調査の記録です。

本遺跡は平成 4 年に調査を行なった第 1 地点の西、平成 18 年に調査を行なった第 2 地点の南に位置します。本調査では第 2 地点で発見されている弥生時代の墳墓群の続きに位置する木棺墓を、第 1・第 2 地点で発見されていた古墳時代の掘立柱建物と同時期の掘立柱建物等を検出しました。近隣には古墳時代最古期に該当すると考えられる戸原王塚古墳も所在しており、歴史的なつながりの一旦が垣間見える調査となりました。

しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎず、本遺跡がどのような位置付けになるかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和元年 9 月 30 日
粕屋町教育委員会
教育長　西村　久朝

目次

1　経過・位置と環境
1 調査に至る経過
1 調査体制
1 地理的・歴史的環境
4　調査成果
4 調査成果
4 弥生時代の遺構
5 古墳時代の遺構と遺物
15 おわりに
17　図　版

発　行	粕屋町教育委員会
調査起因	粕屋保健福祉事務所庁舎増築
現地調査	平成 31 年 1 月 8 日 ～ 平成 31 年 3 月 11 日
整理調査	平成 31 年 4 月 1 日 ～ 令和元年 9 月 30 日
使用方位	国土座標第Ⅱ系(世界測地系)
遺構・遺物実測、執筆	福島日出海
製図　高橋幸作、毛利須寿代	
遺構・遺物撮影、編集　高橋幸作	

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

本遺跡は、標高約 12m ほどに位置している。周辺には前期古墳である戸原王塚古墳が所在するほか、豪族居館と考えられる戸原寺田遺跡も確認されている。

調査に至る経過

戸原堀ノ内遺跡第 3 地点の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町戸原東一丁目 7-26 において、平成 29 年 6 月 19 日に、粕屋保健福祉事務所の増築工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である戸原堀ノ内遺跡に含まれており、同年 8 月 21 日に確認調査を実施したところ、現表土約 30cm 下に包含層を確認し、さらにその下層から土坑等の遺構を検出した。この結果に基づき協議を重ねたが、基礎工事による遺跡の破壊が免れないため、記録保存の発掘調査実施後に建築工事を着手することとなった。調査は平成 31 年 1 月 8 日～平成 31 年 3 月 11 日の期間において実施した。報告書作成に係る遺物整理作業は、平成 31 年 4 月 1 日～令和元年 9 月 30 日で実施した。出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の皆さまには、調査の主旨にご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

平成 30 年度（発掘調査）
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村久朝
社会教育課長　新宅信久
同課文化財係主幹　西垣彰博
同係主事　髙橋幸作
同係嘱託職員　朝原泰介、福島日出海（調査担当）、毛利須寿代

平成 31 年度（報告書作成）
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村久朝
社会教育課長　新宅信久
同課文化財係主幹　西垣彰博
同係主事　髙橋幸作
同係嘱託職員　朝原泰介、福島日出海（報告書担当）

地理的・歴史的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は 14.13km² と小さく平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市の四王寺山から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郡山系、犬鳴山系を源とする 3 本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾に注いでいるが、山地から舌状に派生する丘陵が多く伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。

また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して、周りを山地に囲まれた小さな平野である。

粕屋町は江辻遺跡をはじめとして縄文時代から遺跡が確認され、弥生時代になると戸原堀ノ内遺跡や内橋鏡遺跡、辻畑遺跡、新大間池遺跡などで甕棺墓が発見される。

古墳時代になると最初に戸原王塚古墳、その後内橋カラヤ古墳が築造される。戸原王塚古墳は福岡県内でも最古期の古墳になると考えられ、その価値は重要である。当該期の集落跡はまだ確認されていない。

古墳時代中・後期になると、内橋登り上り遺跡で 5 世紀後半代の円筒埴輪が出土しており、近隣にその時期の古墳があったと推察される（註 1）。その後、全長 80 m 級の前方後円墳である鶴見塚古墳が築造され、『日本書紀』によると、528 年磐井の子である葛子が、磐井の乱に連座した罪を免れるため、糟屋屯倉を献上したとされる。比定地については、古賀市鹿部田渕遺跡（註 2）が候補地の一つに挙げられているが、鶴見塚古墳は墳丘規模や石室構造等が那津官家の管掌者の墓ともいわれる福岡市の東光寺剣塚古墳（註 3）と共通する部分が多く、箱崎の内海から須恵川を遡上した場所に位置する立地も非常に示唆的である。この時代の拠点集落としては戸原寺田遺跡が該当する。倉庫群–戸原御堂の原遺跡–を有しており、遺跡内からは幅約 8m の 2 段掘りの大溝を検出し、最下層から紡織に関連する木製品、桙の腕木が出土した。また、鍛冶関連遺

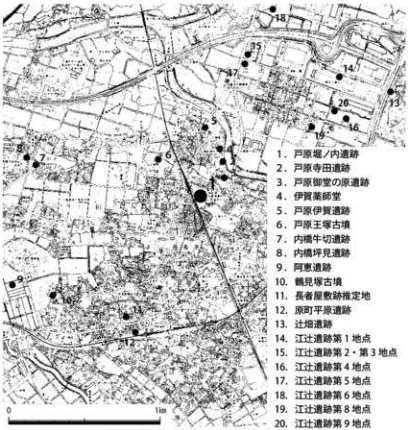
構も出土しており、手工業技術者を抱えていた豪族の存在が想起される。

官衙の遺跡では飛鳥時代から奈良時代にかけての糟屋郡の役所跡が発見された阿恵遺跡が所在する。阿恵遺跡は政庁、正倉、古代道路遺構が確認でき、古代地方官衙の全容が判明する貴重な遺跡である。また、7世紀後半の評段階の遺物が出土しており、京都妙心寺の梵鐘に名前の残る「糟屋評造春米連廣國」が政務をとった遺跡である。

官衙関連遺跡では、夷守駅とみられる内橋坪見遺跡が所在する。大宰府式鬼瓦や顎部分に赤色顔料が付着した軒平瓦、白色土などが出土し、近隣に所在する内橋牛切遺跡からは横板組式井戸が発見されており、格式の高い建物の存在が想定される。

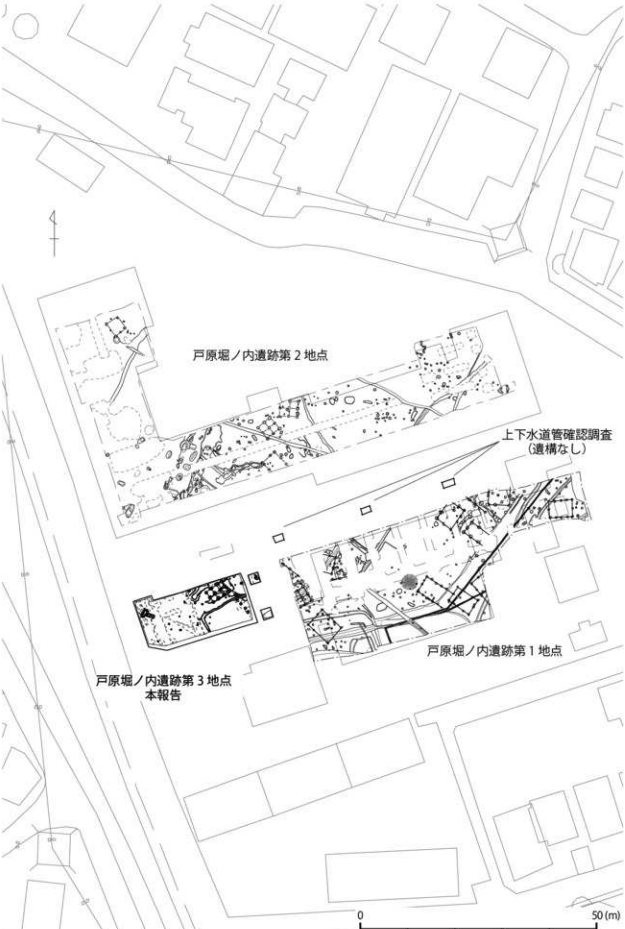
粕屋町は上記のように、古代の手工業技術者集団の存在や、糟屋郡の役所跡、古代官道、駅家など、公的な性格の遺跡が多く所在する。官道に見られる陸路の交通の要衝であったと考えられ、また多々良川、須恵川、宇美川の3本の河川が通っており、河川交通も栄えていたと推察される。近隣には港湾施設と考えられる多々良込田遺跡（註4）も所在し、海上交通も想定される。このように、交通の要衝として重要な地域であったと考えられる。

1) 粕屋町教育委員会『内橋登り上り遺跡第5地点』2020刊行予定
2) 古賀市教育委員会 2003『鹿部田淵遺跡–第2次・6次・7次』
3) 福岡市教育委員会 1991『東光寺剣塚古墳』
4) 福岡市教育委員会 1980『多々良込田遺跡Ⅱ』、1985『多々良込田遺跡Ⅲ』



第1図　戸原堀／内遺跡位置図（1/25000）

第2図　戸原堀／内遺跡周辺図（1947年米軍撮影の航空写真）



第 3 図　戸原堀ノ内遺跡周辺図（1/800）

調査成果

今回の調査では弥生時代の木棺墓１基をはじめ、古墳時代の掘立柱建物２棟、柵１列、土坑１基、木棺墓１基、溝状遺構等を検出した。

第４図　戸原堀／内遺跡第３地点全体図（1/200）

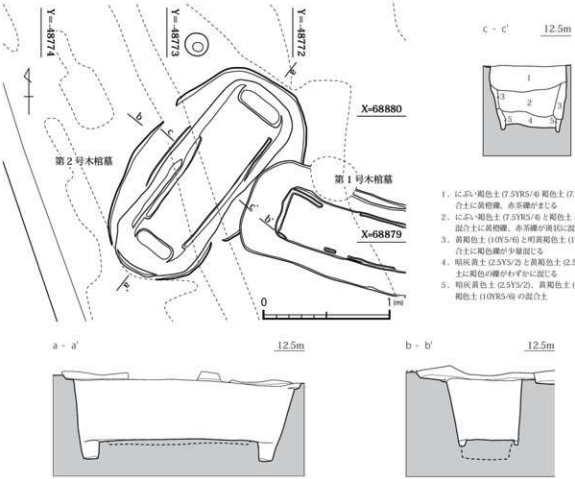
調査成果

今回の調査は、第１地点（平成４年度調査）の西側に当たり、第２地点（平成 18 年度調査）の南側に接する。検出遺構は、弥生時代中期の木棺墓１基、古墳時代後期７世紀前後の掘立柱建物２棟、柵１列、土坑１基、溝状遺構２条、木棺墓１基、不明土坑１基である。弥生時代の木棺墓は第２地点で検出された弥生墳墓群の南限を示す可能性がある。古墳時代後期の掘立柱建物１棟は、旧建物が２間×2 間であったが、建て替えの結果、新建物の桁行が西側に１間ほど長くなる建増しを行なったと想定される。建物から西に離れた古墳時代後期末の木棺墓は、頭位（西側）付近に鉄製工具（鑿）を副葬しており、鍛冶関連の人物が葬られた可能性を示唆する。特殊な遺物としては、新羅系土器の可能性があるロ縁部片と有蓋三足壺の脚部片が挙げられよう。

弥生時代の遺構

第２号木棺墓（第５図）

調査区の西端部に位置し、墓壙は二段掘り込みを呈し、頭位は木口幅がやや広い北東方向と考えられる。全長 1.9 m、幅 1.17 m、深さ 0.53 mを測り、方位はＮ－38.1°－Ｅを示す。墓壙の形状は一段目が楕円形状で、二段目は隅丸長方形を呈す。墓壙底部の両側と木口部分にはそれぞれ側板と木口板の痕跡が確認され、その形状から側板を両木口板で挟んだ木棺墓と推定される。木棺の内法は長さ 1.26 m、中央幅 0.38 m、頭位（北東側）幅 0.45 m、側部（南西側）幅 0.34 mを測る。墓壙の断面形は縦横ともに逆台形状を呈し、側部北東側の側板と墓壙の間には、固定のための充填土が確認できる。土層断面図を観察すると、両側面の下部に幅 0.03 m、高さ 0.1 mと幅 0.04 m、高さ 0.17cm の暗灰黄色土層（第５層）が見られ、その上にそれぞれ第３層



第５図　２号木棺墓平面図、断面図、土層図（1/30）

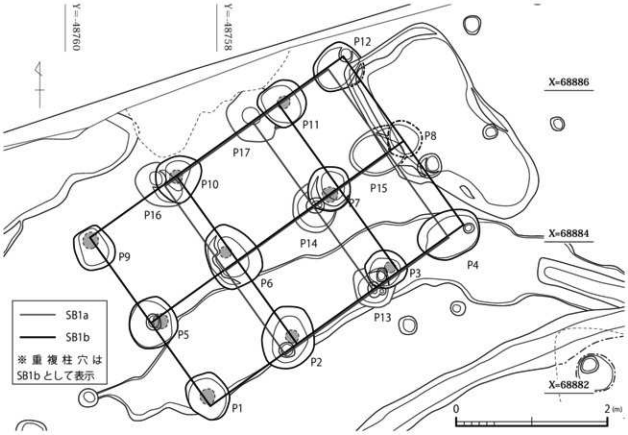
が堆積する。前者は 側板の腐朽土であり、後者は側板が腐朽後に陥没し上方が空洞化した後の堆積土と考えられ、本来の木棺の高さは 0.4m 以上と推定されよう。第４層は側板を固定するための充填土で、層中に底板の痕跡は確認できなかった。第２層は木棺の木蓋が腐朽後に落下した陥没土で、第１層は第２層の陥没後に堆積したものと考えられる。なお、土層の切り合いから木蓋の腐朽陥没によって第２層が落下し堆積したもので、その後に側板が腐朽したことが分かる。なお、当該期のものは１基のみであったが、当遺跡第２地点調査（註 1）時に検出された、弥生時代中期の墳墓群に属するものと考えられ、一群の南限に位置する可能性がある。

古墳時代の遺構と遺物

第１号掘立柱建物（SB1a・SB1b）（第６図、第７図）

当建物は、SB1a【旧】２間（桁行）×2 間（梁行）と SB1b【新】3 間（桁行）×2 間（梁行）の２棟の総柱建物が重複すると考えられる。確認される柱穴の総数は 17 基、主軸方位はともに N−54.6−E を示す。表１～３には柱穴規模、柱間間隔、桁行長、梁行長の各寸法を記す。

総数 17 基中に新旧の切り合いを示すものは、P13 ⇒ P3、P14 ⇒ P7、P15 ⇒ P8、P16 ⇒ P10、P17 ⇒ P11 といずれも東側の柱穴が西側を切っており、その関係から SB1a が SB1b より古いことがわかる。また、柱穴の切り合いが確認されない P1、P2、P4、P5、P6、P9、P12 ついて柱穴の規模を比較すると、P1=0.65m×0.55m、P2=0.85m ×0.70m、P4=0.85m×0.55m、P5=0.57m、P6=0.85m×0.70m、P9=0.56m×0.53m、P12=0.67m ×0.65m となり、概ね 0.60m 前後と 0.85m の二群に分かれる。さらに、明確に切り合いの分かる P3=0.57m、P7=0.60m、P11=0.58m の柱穴規模を考え合わせると、新旧両建物の柱穴１基の大きさが 0.60m 前後と判断されよう。次に、0.85m の規模を示す P2、P4、P6 の柱穴は、SB1a と SB1b の柱穴が明らかに重複する位置にありながら、切り合い関係が確認できない状況である。おそらく、0.60m 前後の柱穴を完全に壊す形で新たに構築



第6図　第1号掘立柱建物（SB1a、SB1b）平面図(1/50)

柱穴番号	規模（m）（径・長軸×短軸）	深さ（m）
P1	0.65 × 0.55	0.51
P2	0.85 × 0.70	0.59
P3	0.57	0.49
P4	0.85 × 0.55	0.57
P5	0.65	0.46
P6	0.85 × 0.70	0.58
P7	0.60 × 0.57	0.51
P8	0.50	0.34
P9	0.56 × 0.53	0.58
P10	0.60 × 0.55	0.55
P11	0.58	0.43
P12	0.67 × 0.65	0.59
P13	0.60 × ?	0.59
P14	0.60 × ?	0.51
P15	0.65 以上× 0.60	0.59
P16	0.60 × ?	0.62
P17	0.7	0.64

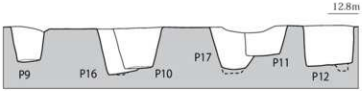
第1表　第1号掘立柱建物　柱穴規模

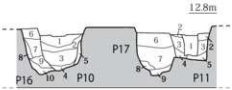
新（SB1b）旧（SB1a）対応表					
SB1a（桁行）			SB1b（桁行）		
柱穴番号	柱間（m）		柱穴番号	柱間（m）	
			P1－P2	1.4	
P2－P13	1.45		P2－P3	1.65	
P13－P4	1.2		P3－P4	1.1	
		⇔	P5－P6	1.4	
P6－P14	1.45		P6－P7	1.65	
P14－P15	1.2		P7－P8	1.1	
			P9－P10	1.4	
P16－P17	1.45		P10－P11	1.65	
P17－P12	1.2		P11－P12	1.1	
SB1a（梁行）			SB1b（梁行）		
柱穴番号	柱間		柱穴番号	柱間	
			P1－P5	1.35	
P2－P6	1.35		P2－P6	1.35	
P13－P14	1.35		P3－P7	1.35	
P4－P15	1.35	⇔	P4－P8	1.35	
			P5－P9	1.37	
P6－P16	1.37		P6－P10	1.37	
P14－P17	1.37		P7－P11	1.37	
P15－P12	1.37		P8－P12	1.37	

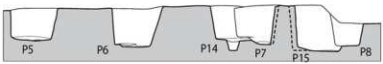
第2表　第1号掘立柱建物　柱間間隔

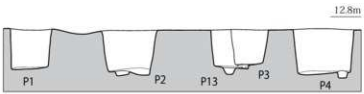
新（SB1b）旧（SB1a）対応表							
SB1a（桁行）			SB1b（桁行）		SB1a（梁行）		SB1b（梁行）
柱穴番号	全長（m）		柱穴番号	全長（m）	柱穴番号	全長（m）	柱穴番号 全長（m）
P2－P4	2.65	⇔	P1－P4	4.15			⇔ P1－P9 2.72
P6－P15	2.65		P5－P8	4.15	P2－P16	2.72	P2－P10 2.72
P16－P12	2.65		P9－P12	4.15	P13－P17	2.72	P3－P11 2.72
					P4－P12	2.72	P4－P12 2.72

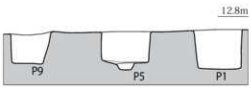
第3表　第1号掘立柱建物
桁行・梁行規模

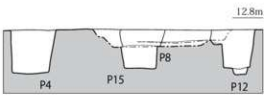


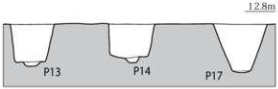


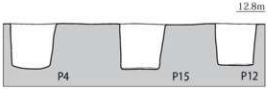












P10

1．明赤褐色土（5YR5/6）と灰褐色土（5YR6/2）の混合土に明赤褐色土がまだらに混じる（柱痕）

2．にぶい橙色土（7.5YR6/4）と灰褐色土（7.5YR6/2）の混合土に明黄褐色土（10YR6/8）がまだらに混じる

3．にぶい褐色土（7.5YR5/3）に黄橙色土（10YR7/8）がまだらに、また、炭が少量混じる

4．黄橙色土（10YR7/8）とにぶい黄褐色土（10YR6/4）の混合土に灰黄褐色土（10YR6/2）が少量混じる

5．明黄褐色土（10YR6/8）とにぶい黄褐色土（10YR6/4）の混合土

P16

6．にぶい黄橙色土（10YR6/4）とにぶい黄褐色土（10YR5/3）の混合土に炭が少量混じる

7．にぶい黄橙色土（10YR6/4）とにぶい黄褐色土（10YR5/3）の混合土

8．明黄褐色土（2.5Y6/6）

9．にぶい黄褐色土（10YR5/4）と褐色土（10YR4/4）に黄橙色土（10YR7/8）がまじる

10．にぶい黄色土（2.5Y6/4）と明黄褐色土（2.5Y7/6）の混合土に炭が少量混じる

P11

1．明赤褐色粘質土（5YR5/8）

2．にぶい赤褐色土（5YR5/4）に黄橙色粘質土（10YR8/6）をブロック状に含む

3．明赤褐色粘質土（5YR5/6）に黄橙色粘質土（10YR8/6）のブロックを多く含む

4．黄橙色粘質土（10YR8/6）に明赤褐色粘質土（5YR5/6）を含む

5．浅黄橙色粘質土（7.5YR8/6）に赤橙色の礫を含む

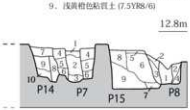
P17

6．明赤褐色粘質土（5YR5/8）に黄橙色粘質土（10YR8/6）のブロックを含む

7．赤褐色粘質土（5YR4/8）に黄橙色粘質土（10YR8/6）のブロックを多く含む

8．黄橙色粘質土（10YR8/6）に明赤褐色粘質土（5YR5/6）を含む

9．浅黄橙色粘質土（7.5YR8/6）



P8

1．赤灰色粘質土（2.5YR5/1）に明黄褐色粘質土（2.5YR7/6）を含む（柱痕）

2．にぶい褐色粘質土（7.5YR5/4）

3．橙色粘質土（5YR6/6）に明黄褐色粘質土（2.5YR7/6）をブロック状に含む

4．黄色粘質土（5YR6/6）に灰白色粘質土（10YR7/1）を含む

P15

5．にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）

6．明赤褐色粘質土（2.5YR5/6）と明黄褐色粘質土（2.5YR7/6）の混合土

7．明黄褐色粘質土（2.5YR7/6）に明赤褐色粘質土（2.5YR5/6）が含まれる

8．にぶい橙色粘質土（7.5YR7/4）

9．明黄褐色粘質土（10YR7/6）に明赤褐色粘質土（2.5YR5/6）が混じる。

P7

1．にぶい褐色粘質土（7.5YR5/4）

2．明赤褐色粘質土（5YR5/6）

3．にぶい褐色粘質土（7.5YR5/4）

（柱痕）

4．褐色粘質土（7.5YR4/4）

5．明赤褐色粘質土（5YR5/8）

6．明黄褐色粘質土（10YR6/6）

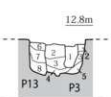
P14

7．にぶい赤褐色粘質土（5YR4/3）

8．明赤褐色粘質土（5YR5/6）に明黄褐色粘質土（2.5YR7/6）のブロックを多く含む（柱痕）

9．明赤褐色粘質土（5YR5/8）に明黄褐色粘質土（2.5YR7/6）のブロックを多く含む

10．赤褐色粘質土（5YR4/6）



P3

1．明赤褐色土（5YR5/6）に黄橙色（10YR7/8）の礫小片と炭が少し混じる（柱痕）

2．明赤褐色土（5YR5/6、5/8）に黄橙色（10YR7/8）の礫がブロック状に、炭も少量混じる

3．にぶい赤褐色土（5YR5/4）に明黄褐色（10YR6/6）礫と炭が少量混じる

4．明黄褐色土（10YR6/6）とにぶい黄褐色土（10YR5/4）の混合土

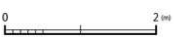
5．黄褐色土（10YR5/6）と明黄褐色土（10YR6/8）の混合土

P13

6．明赤褐色土（5YR5/6）と黄橙色土（10YR7/8）の混合土に炭が少量混じる

7．にぶい黄褐色土（10YR5/4）と黄褐色土（10YR5/6）の混合土に、黄橙色（10YR7/8）の礫小片と炭が少し混じる

8．明黄褐色土（10YR6/6）に明褐色土（7.5YR5/8）が少量混じる



第７図　第１号掘立柱建物（SB1a、SB1b）断面図、土層図（1/50）

された結果、古い柱穴の痕跡が残らなかったと考えられ、柱穴規模も通常よりやや大きくなっているのであろう。したがって、SB1a【旧】(P2・P13・P4・P6・P14・P15・P16・P17・P12)は、2間(桁行)×2間(梁行)で桁行2.65m、梁行2.72mの規模で、SB1b【新】(P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12)は、桁行4.15m、梁行2.72mの規模となり、梁行方向には新旧の両建物とも同じ寸法を示すが、桁行方向には新建物が旧建物より1.50mと一間ほど長くなっている。SB1a【旧】とSB1b【新】は明らかに切り合っているが、両建物とも梁行の寸法が等しく、重複する柱穴9基の内4基が同じ位置にあり、切り合う5基も桁行方向の東側に一様に0.30m(1尺)ほど移動するという状況である。つまり、総柱建物を倉庫と想定しSB1a【旧】とSB1b【新】2棟の関係を考えると、建物規模を2間×2間から2間×3間へと床面積を拡張させ、建物の収納空間を拡大する目的で建て替えを行なったと考える。また、旧建物と梁行を重ね、柱穴もほぼ重なる位置にあることから、建て替えは旧建物の位置、方位、柱間等を意識して行なわれたものであろう。

第1号掘立柱建物出土遺物(第8図)

SB1a柱穴(P13、P14)内出土土器(1～3)、SB1b柱穴(P1、P3、P5、P7、P8、P9)内出土土器(4～12)、SB1aとSB1bの重なる柱穴(P2、P4、P6)内出土土器(13～29)に区分した上で報告する。

SB1a(旧建物)

P13:1は須恵器の杯身で、口縁及び底部を欠く。受部径は12cmを測ることから口径10cm前後と推定され、器壁厚は0.7cm前後と厚い。調整は外面の下部に回転ヘラケズリ、上部に横ナデ、内面の上部に横ナデ、下部にナデが観察される。

P14:2は須恵器杯身の口縁部片で、調整は内外の両面に横ナデが観察される。3は須恵器の杯身で、内傾する立ち上がりは高さも0.6～0.7cmと短いため、受部ラインからわずかに0.4cmの部分が見えることになる。口径10.8cm、受部径13.2cm、高さ3.7cmで、器壁厚0.5～0.7cmとやや厚手である。調整は外面下部に回転ヘラケズリが施されるが、体部の一部には手持ちのヘラケズリらしき痕が観察される。内面上部には横ナデ、下部にはナデが施される。

SB1b(新建物)

P1:4は土師器甕の口縁部片で、形状は外反気味に立ち上り口縁端部が肥厚してやや強く外反する。調整は外面にナデ、内面に横ナデが観察される。

P3:5は須恵器甕の口縁部片で、逆ハの字状を呈して直線的に口縁が開く。全体の形状は逆台形で頸部との境は強く屈曲する。口径11.3cm、高さ3.7cmを測り、器壁厚は0.3～0.4cmと薄手に仕上げられ、調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。

P5:6は土師器甕の口縁部片で、頸部がわずかに屈折し全体に外反気味となる。口縁端部は断面形が三角形状を呈す。

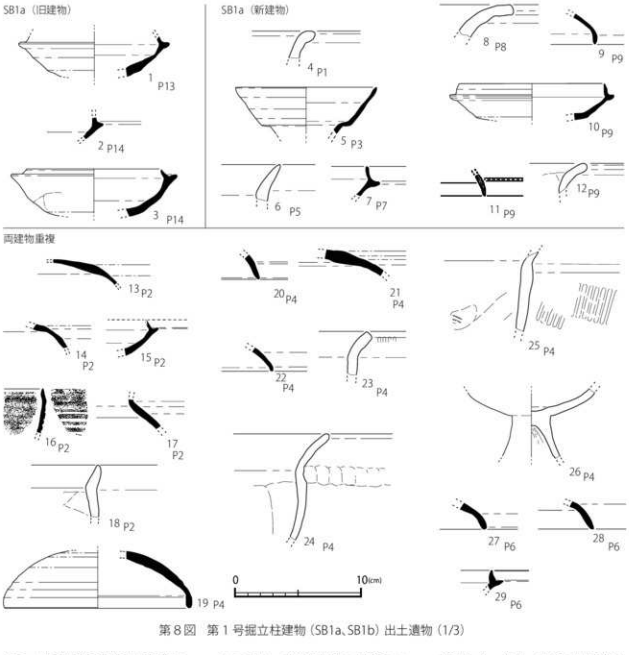
P7:7は須恵器杯身の口縁部片で、立ち上り部分は外湾気味に直立し、口縁端部を丸く納めており、高さは1.0cmを測る。調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。

P8:8は土師器甕の口縁部片で、大きく外反し器壁1.0cmと厚手である。口縁端部は隅丸方形状を呈し、調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。

P9:9は須恵器杯蓋の口縁部片で、直立した口縁部は屈折して体部へと移行する。口縁端部は尖り気味で、器壁厚0.3cmほどと薄手に仕上げられる。調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。10は須恵器杯身で、立ち上りは直立し高さ0.8cmを測る。体部は下半で屈折して浅く、口径11.5cm、受部径13.0cm、高さ4.0cmを測る。調整は外面の口縁部から体部にかけて横ナデが施され、底部付近には回転ヘラケズリが観察される。内面は横ナデで仕上げている。11は小片で不明な点が多いが、新羅系土器(註2)の可能性が考えられる。現状では有蓋系高杯の蓋の口縁部片を想定しており、高さ1.6cm、器壁厚0.25～0.3cmとかなりの薄手で丁寧なつくりである。形状は全体に緩やかな内湾を示し、尖り気味の口縁端部は若干内傾する。色調はにぶい赤褐色で胎土は全体にきめ細かく良好であるが、微量の粗い石英粒が含まれる。焼成は良好であるが高温によるものか断面に細かな気泡状の孔が多く存在する。調整は内外の両面ともに丁寧な横ナデが観察され、内面がわずかに屈折する。特に、口縁部外面には1条の細い突帯状の貼付文が剥がれた痕跡があり、その上下両端にはわずかに沈線状の細線が見られる。おそらく突帯状の貼付文を器面に固定するため、ヘラ状工具等のナデによる接合が行われたと考えられる。12は土師器甕の口縁部片で、大きく外反し口縁端部を丸く納める。資料全体に風化が進むものの内面にヘラケズリの調整痕が観察される。

新旧両建物の重複柱穴

P2:13は須恵器杯蓋の天井部



第８図　第１号掘立柱建物（SB1a、SB1b）出土遺物（1/3）

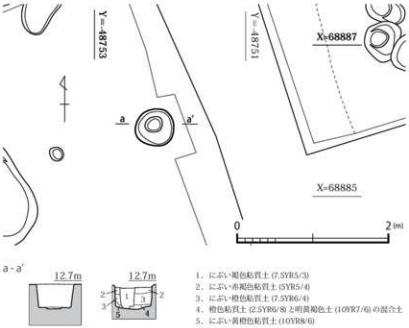
片で、調整は外面に粗目の回転ヘラケズリと横ナデ、内面上部にはナデ、下方には横ナデが観察される。14は須恵器杯蓋の体部片で、調整は外面上部に回転ヘラケズリ、下方には横ナデ、内面上部にはナデ、下方には横ナデが観察される。15は須恵器杯身の口縁部片で、立ち上りはやや内傾し高さ0.8cmを測り、全体に深めで丸味を帯びる。色調は青灰色を呈す。16は須恵器椀（金属器模倣）の口縁部片で、垂直に立ち上る。口縁部と体部の境で一度屈曲した後に緩やかに内湾する。口縁端部の内面は面取りされ鋭利に仕上げられており、全体に薄手の丁寧なつくりで金属器椀の雰囲気を出す。体部外面には４条の凹線を入れ、内外の両面を丁寧に横ナデする。器壁厚は0.2～0.3cmと薄いが、胎土には砂粒が含まれ焼成も甘く軟質 気味である。17は須恵器壺（短頸か）の肩部片で、なで肩に直立する頸部と考えられる。18は土師器甕の口縁部片で、直立するが内面は凹面状を呈す。調整は外面に横ナデ、下方にはヘラケズリが観察される。

P4：19は須恵器杯蓋で、直立した口縁部は屈折して体部へと移行し、全体に丸味を帯びてやや甲高となる。また、内面の屈折部は沈線状に窪んで段状となる。調整は天井部外面に丁寧な回転ヘラケズリ、体部から口縁部にかけて横ナデが施され、天井部内面にナデ、口縁部付近は横ナデが観察される。口径14.8cm、器高4.5cmを測り、器壁厚は0.4～0.8cmとやや厚手につくられている。20は須恵器杯蓋の口縁部片で、内傾気味に立ち上る。21は須恵器杯蓋の天井部片で、調整はやや粗目の回転ヘラケズリが観察される。22は須恵器杯蓋の口縁部片で、口縁端部がわずかに屈折する。調整は内外の両面ともに横ナデが

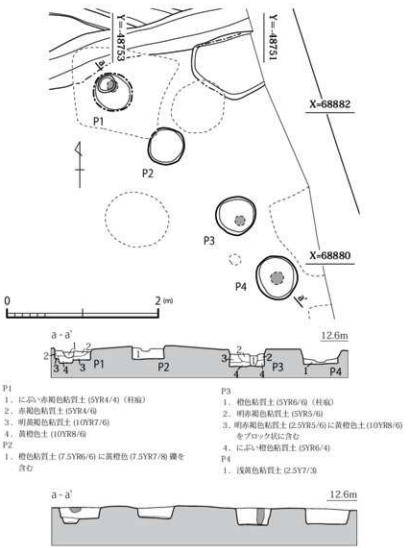
観察される。23は土師器甕の口縁部片で、緩やかに屈折して外反し、口縁端部の断面形は方形状を呈す。24は土師器甕の上半部で、口縁部は長く緩やかに外反し、頸部付近で屈折した後に緩やかに内湾する胴部となる。頸部には成形時の指オサエによる指頭痕があり、胴部内面には粗いヘラケズリの調整が観察される。25は赤焼土器甕の胴部片で、直立気味の外面には斜行するタタキメ、内面には当具痕が観察される。26は土師器高杯で、杯部は椀形を呈し、脚部の裾は広がるものと考えられる。脚部内面の上部に絞り状の痕跡が観察される。

P6：27は須恵器杯蓋の口縁部片で、口縁端部を丸く納め、わずかに屈折しながら体部へと続く。調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。28は須恵器杯蓋の口縁部片で、口縁端部を丸く納め、緩やかな曲線を描いて体部へと続くが、口縁部と体部の境がわずかに屈折する。調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。29は須恵器杯身の口縁部片で、立ち上り部分が直立して高さ0.8cm、器壁厚0.5cmを測る。調整は内外面の両面ともに横ナデが観察される。

以上、出土資料の諸特徴から、旧建物のP13：1、P14：3は牛頭編年のⅣB期、新建物のP3：5とP9：10もⅣB期と考えられる。また、新旧両建物が重複する柱穴のP2：16、P4：19もⅣB期に位置づけられよう。須恵器については新建物P7：7がⅢB期となろうか、それ以外はⅣB期と考えられ、Ⅴ期に下るものは見当たらない。土師器も概ねそれと矛盾ないと考える。したがって、建物の時期を7世紀初頭から前半代として捉え、建物の建て替えはその時期内で行われたと考えたい。また、新建物のP9出土の新



第9図　第2号掘立柱建物平面図、断面図、土層図(1/50)



第10図 柵平面図、土層図、断面図 (1/50)

羅系土器の可能性がある 11 については、P7：7 が IIIB 期となることから、6 世紀後半から 7 世紀前半という中で押えておきたい。

第 2 号掘立柱建物（第 9 図）

柱穴は 1 基のみの確認であるが、平面形が円形を呈し、径 0.50 m、深さ 0.33 m を測る。土層断面を観察すると、径 0.20 m の柱痕断面が確認され、その両側には第 3 層の埋土が整然と積み重なっており、調査区外の東側に建物の広がりが想定される。遺物は出土していない。

柵（第 10 図）

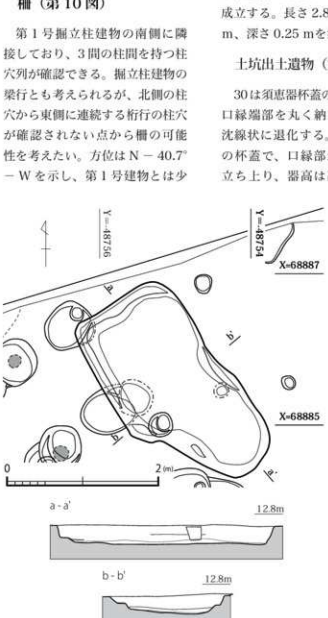
第 1 号掘立柱建物の南側に隣接しており、3 間の柱間を持つ柱穴列が確認できる。掘立柱建物の梁行とも考えられるが、北側の柱穴から東側に連続する桁行の柱穴が確認されない点から柵の可能性を考えたい。方位は N − 40.7° − W を示し、第 1 号建物とは少しずれる。柱間の間隔は、P1 と P2 間 0.55 m、P 2 と P 3 間 0.73 m、P 3 と P 4 間 0.50 m を測り、P 2 と P 3 の柱間がやや広くなる。柱穴の規模は、いずれも円形を呈し径が 0.50 ～ 0.55 m、深さは削平のため 0.15 ～ 0.20 m と浅く、柱痕は径 0.15 ～ 0.20 m を測る。遺物は出土していない。

土坑（第 11 図）

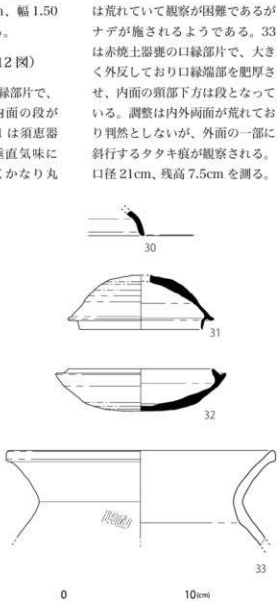
平面形は北側が方形状で南側が楕円状で、二段状に掘り込まれ底部は平底を呈す。遺構の西側は第 1 号掘立柱建物の柱穴を切っており、建物⇒土坑という前後関係が成立する。長さ 2.85 m、幅 1.50 m、深さ 0.25 m を測る。

土坑出土遺物（第 12 図）

30 は須恵器杯蓋の口縁部片で、口縁端部を丸く納め内面の段が沈線状に退化する。31 は須恵器の杯蓋で、口縁部が垂直気味に立ち上り、器高は高くかなり丸味を帯びる。口径 9.8cm、受部径 11.6cm、器高 4.3cm を測り、体部の器壁厚は 0.8cm と厚い部分がある。調整は外面の天井部に粗い回転ヘラケズリ、体部から口縁部にかけて横ナデが観察される。内面は天井部にナデ、体部から口縁部にかけて横ナデが施される。32 は須恵器の杯身で、立ち上りは 0.4cm の厚手で内傾し、端部は丸味を帯びて高さ 0.5cm と低い。口径 11.4cm、受部径 13.5cm、器高 3.3cm で全体に浅い。調整は外面の底部に粗目の回転ヘラケズリ、体部から立ち上り部には横ナデが観察される。内面は荒れていて観察が困難であるがナデが施されるようである。33 は赤焼土器甕の口縁部片で、大きく外反しており口縁端部を肥厚させ、内面の頸部下方は段となっている。調整は内外両面が荒れており判然としないが、外面の一部に斜行するタタキ痕が観察される。口径 21cm、残高 7.5cm を測る。



第 11 図 土坑平面図、断面図（1/50）



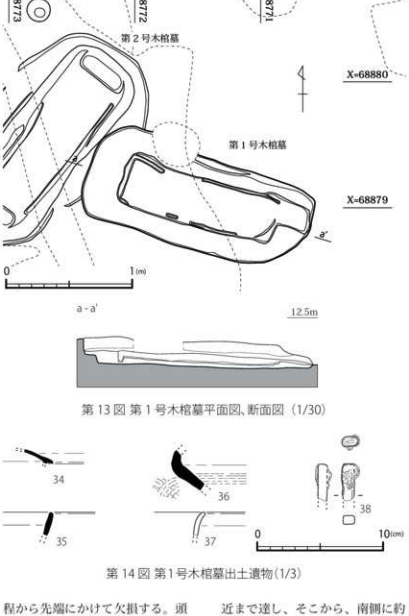
第 12 図 土坑出土遺物（1/3）

以上、出土資料の諸特徴から31は牛頸編年のⅤ期、32はⅣB期に位置付けられ、33もその時期に含まれると考えられることから7世紀前半頃の遺構と推定する。

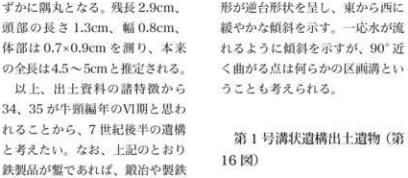
第1号木棺墓（第13図）

調査区の西端部に位置しており、第2号木棺墓を切って存在する。墓壙は二段掘り込みを呈し、頭位は墓壙の幅がやや広く木口板の痕跡が明確である北西方向と考えられる。全長1.83 m、幅0.73 m、深さ0.23 mを測り、墓壙の形状は隅丸長方形状で、方位はN－83.2°－Wを示す。構造は墓壙を二段に掘り込み、二段目の底に0.05 mほどの高さで土を入れ、中央付近に木口板と側板で木棺を組み立てる。その後、さらに木棺の周囲に土を充填し棺を固定する方法をとる。墓壙底部には側板と木口板の痕跡が確認され、その形状から箱形状を呈すと考えられる。木棺の内法は長さ1.20 m、中央幅0.33 m、頭位（北西）幅0.33 m、足部（南東）0.34 mを測る。

なお、頭位（北西）の木口板と側板の接する付近で、鏨状の鉄製品が検出されており、副葬品の可能性が考えられる。



第13図 第1号木棺墓平面図、断面図（1/30）



第14図 第1号木棺墓出土遺物（1/3）

第1号土坑出土遺物（第14図）

34は須恵器杯蓋の口縁部片で、全体に低平でかえりを有し、口縁端部からかえりまでは0.05cmを測る。調整は内外の両面に横ナデが観察される。35は須恵器杯身の口縁部片で、直立気味に立ち上り、口縁端部は丸く納める。調整は内外の両面に横ナデが観察される。36は須恵器甕の頸部で、くの字に大きく湾曲し、外面にはカキメ、内面には当て具痕の青海波が観察される。37は土師器鉢の口縁部片で、直立気味の体部から緩やかに外反し、口縁端部を丸く納める。38は鏨状鉄製品で、中程から先端にかけて欠損する。頭部は楕円状だが、側面は頭椎状を呈す。体部は断面形が方形状でわずかに隅丸となる。残長2.9cm、頭部の長さ1.3cm、幅0.8cm、体部は0.7×0.9cmを測り、本来の全長は4.5～5cmと推定される。

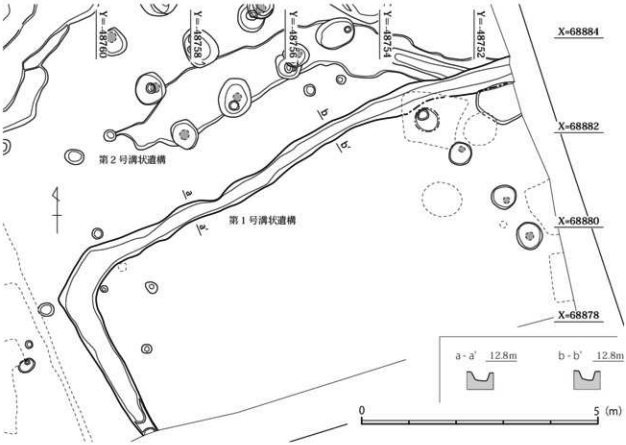
以上、出土資料の諸特徴から34、35が牛頸編年のⅥ期と思われることから、7世紀後半の遺構と考えたい。なお、上記のとおり鉄製品が鏨であれば、鍛冶や製鉄関連の人物が葬られていた可能性はあろう。

第1号溝状遺構（第15図）

調査区の東側から調査区中央付近まで達し、そこから、南側に約90°曲がって調査区外へと延びていく。幅0.30～0.50 mで断面形が逆台形状を呈し、東から西に緩やかな傾斜を示す。一応水が流れるように傾斜を示すが、90°近く曲がる点は何らかの区画溝ということも考えられる。

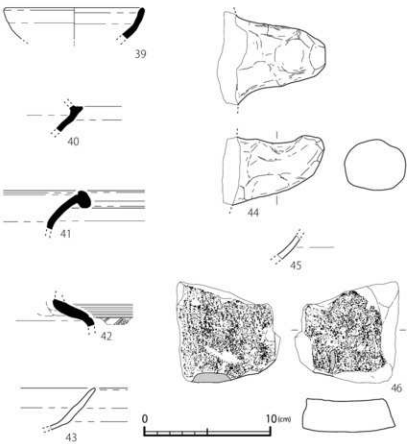
第1号溝状遺構出土遺物（第16図）

39は須恵器杯身の口縁部片で、緩やかに外湾し口縁端部を丸く納める。口径11cm、残高2.5cmを測り、器壁厚0.4～0.5cmとやや厚手で、受部のない椀状を呈



第 15 図 第 1 号溝状遺構平面図、断面図（1/80）

し全体に丸味を帯びる。調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。40 は須恵器杯身の受部片で、外面には横ナデ、内面上部に横ナデ、下部にはナデが観察される。41 は須恵器甕の口縁部片で、大きく外反し口縁端部を玉縁状に大きく肥厚させる。調整は内外の両面ともに横ナデが観察される。42 は須恵器甑の肩部片で、外面にはカキメが施され、その下方を沈線で区画した中に櫛状工具による列点文が施される。内面には指オサエと横ナデが観察される。43 は土師器高杯の口縁部片で、緩やかに外反するが外面下方が屈折する。44 は土師器甑の把手で、全面を指オサエと指ナデで仕上げる。長さ 8cm、幅 4.8cm、厚さ 4cm を測る。45 は白磁椀の体部片で、色調は灰白色、胎土も白色で良好。焼成において表面に気泡が見られる。46 は平瓦片で全体が磨滅する。凸面には一部に縄目



第 16 図 第 1 号溝状遺構出土遺物（1/3）

第 17 図 第 2 号溝状遺構平面図、断面図（1/60）

痕が残るが、凹面には何も観察できない。厚さ 2.4cm を測り、色調は灰褐色、胎土には少しの砂粒と多量の赤褐色粒子が含まれる。

以上、出土資料の諸特徴から 39 は牛頸編年のⅤ期、40 ～ 43 も古式のものが含まれるが、いずれも古墳時代後期の範疇であり、7 世紀前半の遺構と考えられる。なお、46 は奈良時代後半以降の可能性が高く、45 は中世の遺物であるが、これらは溝中央付近の遺構検出面から得られており、上部の撹乱層に由来する可能性が高い。

第 2 号溝状遺構（第 17 図）

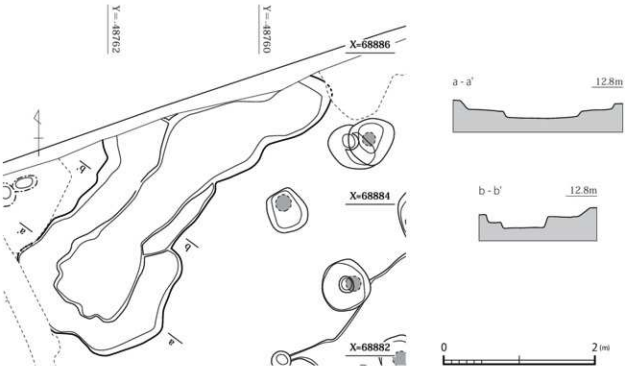
第 1 号溝状遺構と第 1 号掘立柱建物に切られており、北側に緩やかに湾曲するが、途中で失われる。幅約 1 m、長さは調査区内で 8 m ほどが確認される。出土遺物は検出されていないが、他の遺構との切り合いから 6 世紀末～ 7 世紀前半以前の遺構と推定されよう。

不明土坑（第 18 図）

調査区中央部の北側端部に二段状に掘り込まれた溝状に長い不整形の遺構で、長さ 4.7 m、幅 2 m、深さは 20cm ほどである。

不明土坑出土遺物（第 19 図）

47 は須恵器の杯蓋で、天井部外面にヘラ記号が付される。口縁部は直立気味に立ち上り、体部との境は緩やかな段状の高まりとなる。口径 12.7cm、器高 4.1cm を測る。天井部の器壁厚は 1.1cm と厚く、器高も高くて全体に丸味を帯びる。調整は、外面天井部にやや粗いヘラケズリ、体部から口縁部にかけて横ナデが観察され、内面の天井部にはナデ、体部は横ナデが施される。48 は須恵器の杯身で、底部外面にヘラ記号が付される。立ち上りは内傾し高さ 0.7cm と低く、体部は丸味を帯びてやや深い。口径 10.5cm、受部径 13cm、器高 3.8cm を測る。調整は体部の中ほどまで回転ヘラケズリされ、上部は横ナデが施される。内面の底部付近はナデ、上部は横ナデが観察される。49 は須恵器椀（金属器模倣）の口縁部片で、垂直に立ち上り体部へと緩やかに内傾しており、グラスワイン状に脚を有する可能性がある。口径 12.5cm、残高 4.8cm を測り、全体を均一的に器壁厚 0.4cm と薄手に仕上げる。体部外面にカキメが施され、2 条 1 単位の凹線 4 条が付される。色調は灰色、胎土と焼成は良好である。50 は須恵器大甕の口縁部片で、大きく外反し口縁端部を肥厚させ下部付近を強いナデにより凹線状のラインをつくる。口縁部下方の前面にはカキメを施し、上下を凹線で区画した中に斜線文を連続的に施す。その位置からするとさらに下方一段の存在が推定される。51 は須恵器壺の胴部で、形状はなで肩気味だがやや肩が張るもので、底部は平底気味の丸底となる。最大径 8.4cm、現高 6.4cm、肩部の孔は外面の径 1.1cm、内面の径 1.6cm を測り、全体に厚手である。肩部には櫛状工具による列点文が施され、その下方に 2 条の凹線を入れて区画する。また、胴下半全体にはカキメが施される。52 は須恵器有蓋三足壺の脚部片で、やや外方に開くスタイルをとるが下部は欠損する。そのラインは外方が緩やかに外湾し、内方は直線的に内傾するが、欠損部の上方付近から新たに面取りされ獣脚状を呈する。面取りによる成形は全体に及んで多角形をなし、荒削り



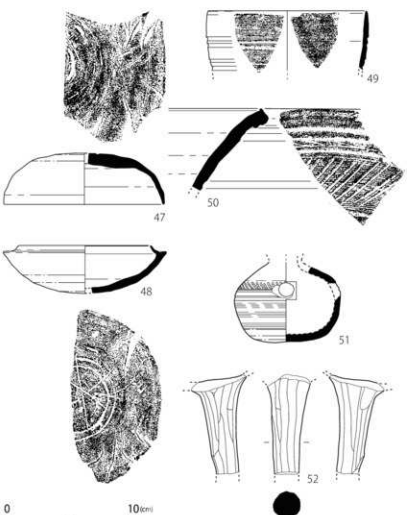
第 18 図 不明土坑平面図、断面図（S=1/50）

の脚姿を想像する。残長 7.9cm、上部径 2.8cm、下部で 2 cm を測る。色調は灰色で外方表面は細かな斑点状となる。胎土は砂粒を少し含むが、焼成とともに良好である。

以上、出土資料の諸特徴から 47、48、49、51 は牛頸編年のⅣA 期あたりと考えられ、52 も 6 世紀末～ 7 世紀前半に位置づけられる（註 3）ことから、当遺構も含め 6 世紀末から 7 世紀前半と考えて矛盾はなかろう。

おわりに

今回の調査は、戸原堀ノ内遺跡第 1 地点（1993）（註 4）、同遺跡第 2 地点（2007）（註 5）に続き、第 3 地点として第 1 地点西側、第 2 地点南側に相当する。成果としては、第 2 地点で確認された弥生中期の甕棺を主とする墳墓群の南限の可能性を有する第 2 号木棺墓を検出した。二段掘り込みの墓壙底部に木口板及び側板の



第 19 図 不明土坑出土遺物（1/3）

痕跡を確認し、側板を両側の木口板で挟み込む木棺の存在を想定した。また、断面観察により側板の痕跡から棺高を 0.4 m以上と推定した。

次の古墳時代では、7 世紀初頭から前半代の 2 間 ×2 間と 3 間 × 2 間の掘立柱建物が重複して検出されており、柱間が 1.2 ～ 1.6m と狭い総柱の様相から倉庫と考えた。さらに、切り合う柱穴の複数存在から新旧 2 棟の建物が偶然に重なっているのではなく、何らかの意図をもった建替えと想定し、柱穴規模、柱間、断面等を検討した結果、床面積を拡張させ建物の収納空間を拡大する目的で行われた建替えと判断した。

旧 建 物 (P2・P4・P6・P12・P13・P14・P15・P16・P17)

新 建 物 (P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12)

※ P2、P4、P6、P12 が重複する。

旧 建 物 が 桁 行 2.65m、 梁 行 2.72m、新建物が桁行 4.15m、梁行 2.72m となり、新旧を比較すると梁行の寸法はそのままに、桁行方向が 1.5m と 1 間ほど長くなっており、その関係については、建物規模を 2 間 ×2 間から 3 間 × 2 間へと床面積を拡張させ、建物の収納空間を拡大する目的で建て替えを行なっており、新建物と旧建物の梁行の寸法が等しく、柱穴もほぼ重なる位置にあることから、旧建物の位置、方位、柱間等を意識した上で建て替えは行なわれたものと判断した。

なお、当遺跡第 1 地点調査時に 10 棟の掘立柱建物が確認されており、調査区西側端部で総柱建物 1 棟が検出されている。第 2 地点の調査区でも北側に 2 棟検出されており、全体の建物において、中央の主要建物群が側柱の建物で構成され、北側及び西側に総柱の建物が配置されているように見える。時期としては第 1 地点において 6 世紀後半と 8 世紀の二時期が想定され、第 2 地点では 6 世紀後半から 7 世紀頃とされている。今回の検出遺物を観察すると 7 世紀初頭から 7 世紀前半頃と判断されることから、6 世紀後半から 7 世紀にかけての期間において建物群が継続する状況が考えられるが、はたして、8 世紀に継続するのかは不明である。

第 1 号木棺墓は、現状として単独的に存在しており、7 世紀後半頃の遺構と考えられる。さらに、検証が必要であるが、鉄製の鏃（註 6）を副葬しており鍛冶や製鉄関連の人物が葬られていた可能性が考えられる。内橋鏡遺跡 2 次調査（2017）（註 7）において 6 世紀後半から 7 世紀前半代の土壙墓が単独で検出され、鏃子状の鉄製品が副葬されていた。これは鏃子状鉄製品を馬具と想定した場合、単独埋葬という特性から馬葬墓の可能性を示した。いずれにしても、古墳時代後期後半から末頃の墳墓として土壙墓や木棺墓が存在し、単独埋葬で存在した例があるようである。

遺物では、SB1b の P9 検出の 11 は、口縁部の細片で器形も不明で詳細を論ずることは出来ないが、共伴する須恵器や土師器とは異質で陶器に近い印象を持つ。器壁厚 0.25 ～ 0.3cm と薄手でわずかに内湾する口縁部には突帯が巡っていたようである。また、色調はにぶい赤褐色を呈し、きめ細かな胎土と断面には細かな気泡状の孔が多くかなり薄くて軽い。これは日常土器とは異なる存在で、新羅系土器の有蓋式高杯にある蓋の口縁部を想定しているものの、さらなる分析と検証を重ねる必要があろう。また、不明土坑検出の 52 須恵器有蓋三足壺は、出土自体が極めて珍しく 1993 年の集成（註 8）時点で、全国に 20 遺跡 26 例が判明している。その大半は古墳で窯跡が 3 例、集落は福岡県春日市惣利西遺跡 10 号住居 1 例で、今回含めると 2 例となろう。

以上、7 世紀を中心として展開する、戸原堀ノ内遺跡の建物群と新羅系土器、有蓋三足壺、鏃状鉄製品との組み合わせは、通常の集落遺跡とは異なる。今後は、当遺跡の北に位置する戸原御堂の原・戸原寺田・戸原伊賀の各遺跡（註 9）を含めた遺跡群として捉え直した上で、その特質性を明らかにすることが重要となろう。

註

1) 粕屋町教育委員会 2007「戸原堀ノ内遺跡第 2 地点」粕屋町文化財報告書 25 集

2) 崔秉鉉　小池史哲・武末純一訳 2018「新羅後期様式土器の編年」『古文化談叢』九州古文化研究会 81 集

3) 嶋田光一 1993「須恵器有蓋三足壺考」『古文化談叢』第 30 集 (中)

4) 福岡県教育委員会 1993「戸原堀ノ内遺跡」福岡県文化財調査報告書 102 集

5) 註 1 に同じ。

6) 松井和幸 1991「古代の鍛冶具」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集

7) 粕屋町教育委員会 2017「内橋鏡遺跡 2 次調査・内橋カラヤ遺跡」粕屋町文化財調査報告書第 40 集

8) 註 3 に同じ。

9) 粕屋町教育委員会 2000「戸原御堂の原遺跡」粕屋町文化財調査報告書 16 集　粕屋町教育委員会 2017「戸原寺田遺跡」粕屋町文化財調査報告書 41 集　粕屋町教育委員会 2019「戸原伊賀遺跡第 1 地点」粕屋町文化財調査報告書 46 集

引用・参考文献

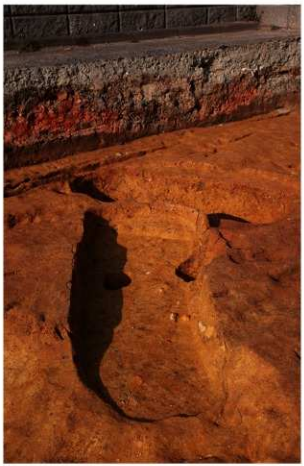
大野城市教育委員会 2008「牛頸窯跡群－総括報告書 1 －」大野城市文化財報告書 77 集

図　版

調査地西側全景（東から）

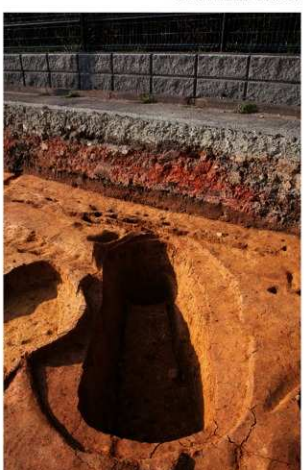
調査地西側全景（北西から）

調査地東側全景（北東から）



第１号木棺墓全景（南東から）

第１号溝状遺構－調査地西側（北東から）



第２号木棺墓全景（北東から）

第１号溝状遺構－調査地東側（東から）

掘立柱建物（SB1a、SB1b）完掘状況（西から）

24

48

26

51

33

47

52

報告書抄録

ふりがな	とばらほりのうちいせきだい3ちてん
書名	戸原堀ノ内遺跡第3地点
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	福島　日出海
編集機関	粕屋町教育委員会
所在地	〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号
発行年月日	2019年9月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
戸原堀ノ内遺跡第3地点	福岡県糟屋郡粕屋町（カスヤ）（カスヤ）戸原東一丁目7-26	403491	280112	33°37′11″	130°28′28″	2019.1.8～2019.3.11	約230㎡	粕屋保健福祉事務所庁舎増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
戸原堀ノ内遺跡第3地点	集落、墳墓	弥生時代、古墳時代	掘立柱建物、溝状遺構、土坑、木棺墓	土師器、須恵器、鉄器	

要約

今回の調査範囲は、平成4年度及び平成18年度の調査区に隣接する。検出遺構は、弥生時代中期の木棺墓1基、古墳後期の掘立柱建物1棟（2棟分）、柵列、木棺墓1基、土坑1基、溝状遺構等である。弥生の木棺墓は木棺板材の痕跡を良く残しており、平成18年度の調査で検出された弥生墳墓群分布の南限を示すと考えられる。古墳後期の掘立柱建物は、当初3間×2間の規模を示すが、その後の建替えとともに東側に1尺ほどの微増の拡張を行なっていた。また、調査区西端に位置する古墳後期の木棺墓は、鉄製工具（鑿）を副葬する点において鍛冶関連の人物が葬られた可能性を示唆する。なお、須恵器有蓋三足壺の脚部片及び新羅系土器の無蓋式高杯の可能性を示す口縁部片の出土は注目される。

戸原堀ノ内遺跡第3地点　粕屋町文化財調査報告書第49集

令和元年9月30日　発行

発行　粕屋町教育委員会
〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）
TEL：092-939-2984　FAX：092-938-0733

印刷・製本　株式会社 三光
〒812-0015　福岡県福岡市博多区山王一丁目14-4
TEL：092-475-6271　FAX：092-475-6274